教主さまお作　灰釉茶盌 銘「元（はじめ）」

【元屋敷土　ご神木榎釉】

題字出口直日

通巻第５８４号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒 110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL　03-3821-3701
FAX　03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

ちはやぶる神のこころは愛善（あいぜん）の
誠（まこと）をおきて何（なに）ものもなし

出口王仁三郎聖師

〝心の栄養〟大道場修行

愛善宣教課主任　柿崎 哲男

この夏、休暇を利用して、聖地での大道場修行を受講させていただきました。

５日間、修行者としての聖地滞在はとても新鮮でした。東光苑でも、日課として外回りと建物内を交互に、お掃除させていただいているのですが、聖地は格別でした。清々しい神気に触れながら、万祥殿では、磨きこまれてつやのある「濡れ縁」を掃き清め、さらに乾拭きをさせていただき、ガラス戸のガラスも磨きます。それが済むと、正面の庭の玉砂利の線引き…。

朝拝を済ませ、朝食後には、まだ木の香が心地よい神教殿の清掃。初めて出会う方とも声を掛け合い、協力しながらのひと時です。

修行中の清掃は、自分自身の内面と向き合う意味合いも深く、より真剣にならせていただけます。大道場修行には、日常生活を正す大切な精神があり、それが両聖地で、育まれているように感じました。

講座の中で、講師の方々からは「生活の中で良い習慣を伸ばし、悪い習慣・クセは省みることが大切である」と、人が向上させていただくために必要なヒントを、何度かご教授いただきました。

『修行のしおり』には、三代教主さまのお示し「足もとの始末だけでも実行すると、心が洗われたようになり、楽しく平穏に包まれたようになります」もあります。さらには鎮魂、食事、入浴、礼儀あいさつ…、生活の心構えがたくさん記され、初心に帰ることができます。

お祈りから履物の始末まで、良い習慣を身につけ、日々、心を向上させていただくための素晴らしい栄養がたくさんありました。

王仁芸術

～耀盌に見る王仁三郎の世界～

美を通じて人々を導くため、出口王仁三郎翁は「耀盌（ようわん）」を焼きました。一盌一盌に魂をこめた作品。盌体の持つ豊かな広がり、神界の輝き、そのままの色彩、天象の紋理をひめた刺孔。終戦前後に作り上げた加彩楽茶盌を通じて翁を紹介します。

耀盌は、出口王仁三郎聖師の集大成の作品です。昭和24年2月6日、陶芸評論家・加藤義一郎氏が、人間国宝・金重陶陽氏宅でこの茶盌を初見して驚嘆。同年三月、「日本美術工芸」誌に「耀盌顕現」と題して発表しました。

佐々木氏親子の入信

王仁三郎聖師の楽焼の制作は、昭和2年ごろ、京都清水の窯元・佐々木楽吉氏、松楽氏の親子が作った素焼きの茶盌素地に絵付けを施していました。しかし、それだけでは物足らなくなり、大本の敷地内に窯場を設け、作陶にいっそう力を注ぎます。

そんな頃楽吉氏は、四十腕と言って両腕がきかなくなり、ボタンを留めるのもままならない状態になったといいます。そんな時、王仁三郎聖師は楽吉氏の腕をつかまえて「フッフッ」と二、三度強く息を吹きかけられました。そうしたら不思議なことに、その場でボタンを自由にとりはずし出来るように、すっかり癒ってしまいます。親子は「有難いのとびっくりするのと一緒で、それ以来二人とも入信しました」と。

以来佐々木氏親子の手伝いを得て、昭和10年12月8日第二次大本事件勃発まで作陶を続けます。ここまでの作品を大本では、前期作品と位置づけています。

大本事件で王仁三郎聖師は6年8カ月間未決収容され、昭和17年無罪判決で釈放され帰郷します。松楽氏はこの頃、亀岡に家を買いもとめ薪置場に使用していました。ただ戦争が悪化して、京都から疎開することになり、父楽吉氏は四国の松山へ、松楽氏は王仁三郎聖師が未決からお帰りになっていたため、買い求めた亀岡の家に疎開して生活をしています。

茶盌造りの開始

昭和19年の暮、12月28日の晩の事、突然、王仁三郎聖師は松楽氏を訪ねます。『これから楽焼を焼こうと思うのじゃが、着想はすっかりできている。あんたもわしが亀岡へ呼び寄せたんや。今から仕事を始めるから、サア早く土を持って来てくれ』と指示されるのです。何しろもう10時を廻っているのに無茶な話ですが、それでも急いで土を練ってロクロなどと一緒に差出されると、その場で茶盌を一つひねられ、簡単に今後の準備の要領をお話になって、その晩はお帰りになりました。

翌29日から大晦日までに、茶盌が20個ほど出来上ります。それを下焼して元日の朝、王仁三郎聖師の許に持参さると、その茶盌に色付けされて、直ちに初窯を焼かれました。その時の絵付けは、酉年にちなんで「鶏」の絵が多かったと聞いています。

この頃は焼物など、とてもできない時代です。松楽氏も焼物から離れ、町内の軍需工場に通っていましたが、ご訪問以来、夕方5時前に帰るようにされます。毎日急いで帰宅されると、王仁三郎聖師はいつも待っておられ、それから毎晩12時、1時までご作陶になりました。

以後、この工程を毎日のように続けます。王仁三郎聖師は高齢でもありましたから、妻である出口すみこ二代教主は大層心配し作陶に反対されていたと言います。

苦心の製作

材料となる土は、王仁三郎聖師の住居の空池の底を掘るのですが、何しろ冬の季節ですからカンカンに凍っているのでひと苦労されています。後になると東光苑（大本）の歌碑の跡を身長ほど掘り運ばれました。亀岡の土はどこを取って来てもパサパサで粗末なものです。とても普通の陶器屋の手をつけるような代物ではありません。そこで京都の土を持って来てつなぎに一割位混ぜますが、それでも腰が弱くて難儀されています。王仁三郎聖師は『それ、ヘタルヘタル』と言っては苦心されていたそうです。そこで、王仁三郎聖師は松楽氏に相談して、表面に白い土で化粧を施すことにしました。白い土で表面を固めることによって土がヘタリにくくなります。その上、白い化粧土を付けることで、絵付けの発色が断然良くなっていきます。

また、土質が悪いばかりでなく、戦時中のことですから、原料屋はすべて店を閉めているので一斤の絵具、一束の薪さえ手に入れるのが容易ではありません。松楽氏は閉鎖している原料屋を探し廻っては、売れ残りの原料を掻（か）き集められます。土も十貫目程を担いでは、京都から満員の汽車に乗って帰りました。その頃は切符も自由に買えなかった時代です。絵具は松楽氏の買溜めたものがありましたが、金沢や九州の有田の信者さんから送ってきたりと、全国から熱心なご奉仕がありました。薪は松楽氏の家に一杯詰っています。更に偶然に手に入れたと思っていた家は、昔、王仁三郎聖師が初

～21世紀・生きがい講座～

尾﨑 泰良（おざき やすなが）（大道場講師）

めてアトリエを設けられた家であったそうです。家、割木、絵具、何から何まで王仁三郎聖師のあやつる糸に、すべてがたぐり寄せられていたのです。

窯を焼くこと36回、1回に100個から200個は焼かれましたから、茶盌以外のものを合せると、ゆうに5000個に上る莫大なものです。完成した茶盌は新聞紙に包み荷造りされ、ご満悦でリアカーに積んでお帰りになったそうです。自宅に帰ると、まずご神前にお作品を広げ、感謝の祝詞を奏上されてから、お側の人々に『あんたにも一つ、あんたにも一つ』と、どんな人にでも平等に喜びを分け与えられました。

ただ、昭和21年になると「はたで見る目も痛々しいくらい、おやつれになって、一つ茶盌をひねっては『アア痛い』『アアえら』と寒中に汗をかきながら、きばっておられました」と松楽氏は回想されています。昭和23年ご昇天になりご肉体をもってせられた最後のご神業となり、王仁三郎聖師が昇天後、冒頭の「耀盌」が世の中に出ることになりました。

茶盌の評価

ところで、茶盌の作りには、一応決まりごとがあります。口造り、茶溜まり、高台、見込みなど、耀盌はそうした茶陶の中で決められたものはすべて守られています。だから決して全く異質なものではありません。高台脇あたりにフォークで3本の線が円形に引かれ、また放射状にも引かれているのは面白く大きな特徴で飽きがきません。

茶盌の表面は凹凸で、よく見ると一穴とか二穴というふうに、竹串（ササラ）のようなもので無数に穴が開けられています。時には全面に、時には部分的に。穴を開ける時には、「惟神霊幸倍ませ（かんながらたまちはへ）」という祈りの言葉を何千回と唱えたといいます。そして土止めに使った白化粧がもたらす効果もあって、色彩が一層引き立って見え、透明の釉薬が表面の凹凸で光の角度が変わり、色々なところが光って見えます。正に光耀く茶盌なのです。

耀盌の評価

林屋晴三氏は「初めて耀盌をみたのは昭和24年です。最初は『くだらん茶盌だ』と思った。それまで私の頭には在来の茶盌の概念だけがあり、その尺度に照らしてみて、大きな抵抗を感じた。ところが20年たって亀岡で拝見し、これはすごいものだと驚いた。不明であったことを、この場をかりておわびする。先生の作品は『破格の美』というほかない。それは中世的な伝統のもとに織部が現れ、美濃風なやきものを生み出し、歴史的な貢献をしたのと同じ意義をもつと思う。その後、近世300年を経てこの耀盌が現われたのは、次の時代への可能性を示すものとして注目しなければならない。単に現在の感覚、茶道の約束ごとたけを前提にして『これでは茶が飲めない。茶室に合わない』と素通りしてしまうのでなく、真正面からみつめ、取り組むべき存在だ」と語っています。

加藤義一郎氏は「我等は生れながらにして色感にわび・さびを強要されて、これが日本人の優れた特権であるとさえ思わせられて来たのである。美しい、明るい純粋な色、あるいは我々日本人も遠い昔にはその色を持ったかも知れない。けれども忘れさせられてからもうすでに久しい年が経っている。ことにお茶の世界ではこれが強調され、ことさらに美しい色には眼をつぶらされて来たのである。そしてたまたまフランス絵画の美しい色彩に目覚めることがあっても、それは外国の色だと認識し、少なくともお茶の世界には許されない色であると教え込まれたのである。これは審美の境域においても、世界性を失った孤立の殻に閉じ籠ることなのであった」と茶盌の概念を一度取り外して、その上で耀盌を見なくてはいけないということを言っています。

耀盌の存在意義

大本では、神に通ずる門戸として三つあると教えています。それは善とか愛とかいう方面から神を感ずる道、これは宗教であります。真理、哲学によって神を感ずる道、これは学問であります。そして、美によって神を感ずるのが芸術であります。

王仁三郎聖師は、美しいものを美しいと感じる心を養うことによって、生き生きとした笑顔のあふれる人生を歩んでほしい。宇宙や大自然の美というものを手本として、世界の人々が平和で穏やかな、天国的な道へ進んでほしい。そのような願いを耀盌という芸術作品を作ることによって示されたのです。

どうぞ機会あるごとに耀盌をご覧いただき、心を豊かにして人生をおくって下さい。それが王仁三郎聖師の一番の願いであり、耀盌を作った意味ではないかと思います。

掲載文は、平成29年6月21日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は、10月8日、午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、270人が参拝した。

祭員は関東教区直心会員、少年祭員は東京主会の玉置巴さん、伶人は二絃の会関東支部、伊都能売神論拝読は関口あつ子直心会群馬連合会長、添釜は神奈川主会がそれぞれ担当した。

祭典後、鈴木穎一大本本部長があいさつ。続いて、9月15日から関東教区特派宣伝使として着任した宮原雅博特派があいさつ。また、近畿第一教区に任地が異動した小藪資史特派のあいさつ文を司会が朗読。奉納行事にうつり、シテ・猪子恒センター長による金剛流仕舞「猩々」が能舞台にて舞い納められた。

続いて「世界連邦・近年の動きとこれから」と題し、世界連邦運動日本国会委員会事務局長・塩浜修氏が講演。「日本国憲法の前文に示されてる通り、日本国民の願いは〝恒久平和〟である」として、国家間の紛争や飢餓などの諸問題に触れながら、「世界平和実現の崇高な理念は、世界連邦実現がカギである」として、世界連邦運動の重要性を語った。

直会後には、関東教区青松会主催の「元気が出る研修会」が開催され、阿比留健次本部青松会幹事が「みろく村のご用にお仕えして」と題して講話。参拝者の大勢の聴講で賑わった。

塩浜修講師による講演
「世界連邦・近年の動きとこれから」

東光苑秋季祭式講習会

東光苑秋季祭式講習会は、9月22日から24日の両日に開催され、11人が参加した。

初級クラス受講者は、基本動作から正中動作、後取動作、祝詞展巻奏上、祓式行事など、月次祭までの作法を受講。中級クラスがそれに加え、庭上祭、結婚式などを実習した。庭上祭では、ふだん祭典の機会が少ない上棟祭を講習、地鎮祭との違いや棟札や振幣の位置、修祓順など、実際に模擬祭典を通して実習した。

なお、初級・中級クラス受講者の内3人が大本祭式認定試験を受験した。

21世紀・生きがい講座

第176回「21世紀・生きがい講座」は、10月18日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、一般社団法人愛善みずほ会会員で専業農家の小林善直講師が「正しい食、農のあり方の実践～農道まっしぐら～」と題して講話した。参加者は20人（内、一般3人）

講師は、新鮮な野菜の見分け方や農薬が有害であり、かつ大自然の食物連鎖を損なうことにも触れ、「〝人群万類愛善〟の精神で全てを生かす農法が必要」として、有効微生物や酵素作用によって地力を高め、安全で栄養価の高い農産物を増産する自然農法・島本微生物農法も紹介した。

「開祖さまは百万円のお金より一片のお土のほうがどれだけ大切かが分かれば〝みろくの世〟になるとお諭しになっている」と述べ、一人ひとりがお土から出来たものを大切にし、お土を拝む心にならなければならないと話した。

参加者からは、「農業の基礎知識からエコロジー、天地経綸につながるお話まで分かりやすく学べた」（一般・男性）などの感想が聞かれた。

〝お土を拝む心〟の大切さを語る
自然農法の実践家・小林善直講師

東光苑祭典・行事予定

11月

5日（日）午前10時30分執行
開教125年 大本開祖大祭遥拝祭

12日（日）午前10時30分執行
東光苑秋季大祭
新穀感謝祭・七五三詣り

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題 日本人の誇りと使命
講師 出口眞人（愛善信光会理事長）

25日（土）・26日（日）
東光苑葬祭研修会

12月

10日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭
※当日、天声社の出張販売があります。左の亀岡本社へ事前に注文しておくと便利です。
TEL 0771（24）7523
FAX 0771（25）3655

16日（日）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（181年）

20日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題 ごきげんよう
春風ふくたでございます
～笑う門には福来たる～
講師 春風ふくた（漫才師）

25日（月）午前10時30分
出口日出麿尊師毎年祭（26年）

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com